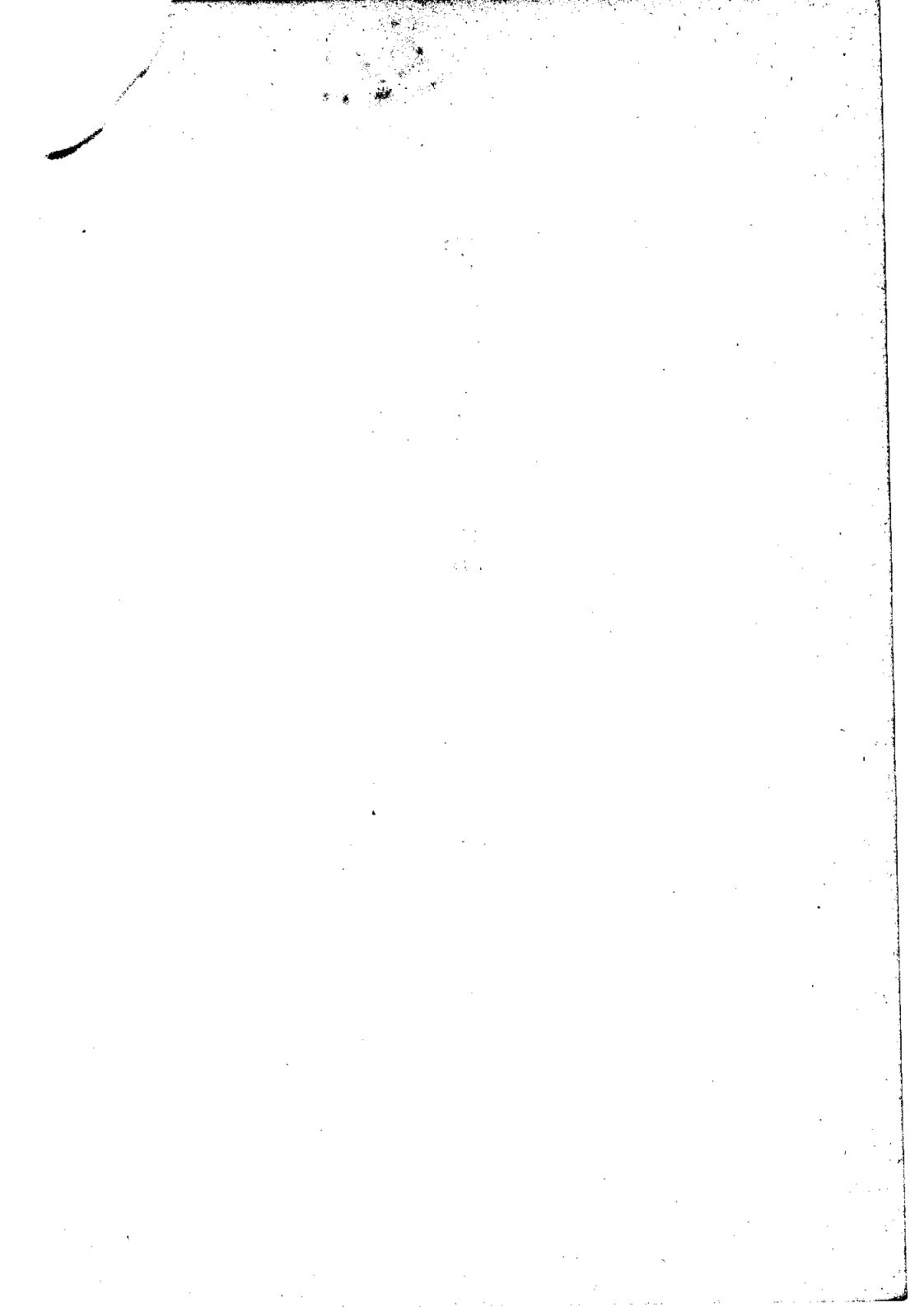


清少納言とその作品

池田龜鑑



平安朝時代は、宮廷を中心とする女流の文藝が、咲く花よりもうるはしく榮えた時代である。なつかしい作家、美しい作品が、夜空の星のやうに私達の文學史に輝いてゐる。就中紫式部と清少納言との二作家とその作品とは、永遠に他の多くの作家と作品とを壓する明星として仰がれるであらう。世界最古の長篇小説としての「源氏物語」と、同じく最古の隨筆集としての「枕草子」とは、私たち日本人が、世界に向つて誇ることの出来る最も尊い寶玉の一に數へられるであらう。

清少納言と紫式部とは、古來才女の雙璧として重んぜられた。この二人は、これまでどれ程多くの批評家によつて論議されたかしのれない。乏しい史料は清紫二女への評論をしても早や過去のそれ等の研究から一步の進出もさへ困難ならしめてゐる。今、清少納言の人とその作品とを考察しようとする本稿の如きも、何等新しい事實を報告するのではなく、又珍らしい發見を紹介するのでもなく、ありふれた平凡な資料の上に、凡庸な解釋を下したに過ぎない。ただその解釋に、多少先人の諸説と趣意を異にする部分があるやうに考へられるから、特にその部分の批判を仰がうと念じて筆を執つたのである。

清少納言の藝術を論評しようとして、私たちの前に興へられてゐる資料は、わづかに「枕草子」と「清少納言集」との二つである。しかもこの兩者には異本が多く、そのいづれが最も原著に近いか、まだ何等明かにされてゐない状態である。かうした不安定かつ不徹底な資料の上に立つて、清少納言とその藝術とを明確に論斷しようといふやうな

事は、先づほとんど不可能なことであり、従つてさうした企圖は輕卒なこととして慎まねければならない。しかし、私たちに少くともかういふことは云へないだらうか——私達の求めてゐる清少納言の人とその藝術とは、どうしても模寫論的なそれではなければならないのであらうか。文學に關する學問は、ありしまゝの作者と作品とを、そのまま再び現出せしめる事のみを目的としなければならぬのであらうか。むしろかくあるべき筈の清少納言とその藝術とを、私たちの心の中に築き育てて行く一面を、嚴密な意味に於ける文學研究の一部として許容してはいけないのであらうか。——といふことである。

勿論私たちは、私達に知識を求める熱烈な要求のあらんかぎり、學問の目的が客觀的な事實の闡明にあるべきであり、度しやかな努力が必ずそこに傾注せられなければならないことを毫も疑ひはしない。しかし文學が生きる力として萬人の心靈に働きかける神秘的な一面を有するものであり、文學に關する學問が、何等かの意味で、直接的全體的人間教養に參じ得るものであるならば、私たちは作品・作家・社會等の外面性の追求に向つて注ぐ努力とほぼ同様の努力を、私たち自身の魂の内面性の追求に向つて注ぐべきである。私たちは、私達が古典文學研究の目的を、單に客觀的事實の闡明のみにありと考へるならば、その目的さへもつひに達成される日はないと云つても差支はない。なぜならば、研究の對象となるべき原典の多くは亡佚してほとんど知るに由なく、作者は遠き過去の社會に於て特殊なる境遇と個性とに生きた人間であるのみならず、研究者自身も亦それぞれ特殊なる環境と性格とに生きてゐる人間であるからである。

右の問題を少し詳しく考へて見よう。もし私達が清少納言自筆の「枕草子」を得たとする。その時私達は、その自筆本の精密なる科學的研究よりして、果して模寫論的に正確な作者の全貌をそのまま把握することが出来るであらう

か。更に言へば、その自筆本によつて研究を進めたA B C D E F …等の多くの學者たちが、悉く全然同一なる結論に到達し得ると云はれるだらうか。むしろ作者に於ける模寫論的眞實は、評者の個性を通じた幾多の「解釋」の彼方に別に存するではなからうか。如何なる解釋も、評者に於ける眞實であり得る以上に、直ちに作者に於ける眞實であり得ると誰が斷言し得よう。極言すれば清少納言の模寫論的眞實は恐らく彼女自身さへも知らなかつたであらう。

文は人なりといふ言葉がある。作品はたしかに作者の「人」を表現する。しかし、自己の眞實を語る、といふことは、およそ如何なる人にも最も恐しい事實に相違はない。「人」はともすれば作品の上からその暗きかげにかくれることがあり得る。少くとも「文」は「人」そのものでない場合もあり得る。まして「文」を解釋する評者の心々によつて、その對象たる「人」の姿が一定しないといふ事は、作品を通じて作者の眞實を把握することの如何に困難なるかを裏書するものである。

作品の上から、作者を論評し、作者の眞實を追求するといふことは、結局「解釋」の問題となるであらう。即ちかくありしままの清少納言の姿を模寫するのではなくて、かくあるべき筈の清少納言の姿を、無限に思慕し建設することである。かくして語られる清少納言は、評者の心が心にゑがく自畫像に外ならない。そしてかかる畫像への精進が如何に文學研究に於て重要な方面であるかは今一度改めて反省せられる必要があると思ふ。

文學作品の原典研究に向つて注がれる嚴密な科學的精神は、かくの如き態度をも決して否定しはしない。眞の批評に於ては、可能の限りに於ける客觀性が一つ一つの「解釋」の根柢に存すべきことが必ず要求されるであらうと同時に、また一方論理的に正しい客觀的事實の上に透徹した天才的な判斷の下されることも必ず要求されるに違ひない。それ故に正確なる根本資料の探及に向つて拂はれる外への努力が、もし純粹なる心を深め清めるための内への努力を

伴はないのであれば、それはも早や文藝科學の正しい精神を遠ざかるものと云はねばならぬ。正しい判断は必然的に正しい資料を要求する。出来るだけ正しい資料に向つて、出来るだけ澄みとほつた判断を下さうともがく學者の前に於てのみ、私達ははじめてその所論に信頼が置けるやうな氣がする。そしてさういふ評論を私たちは常にどれ程待望してゐるであらうか。

しかし今清少納言の人と藝術とを考察しようとするこの小さな論文の如きは、まだきはめて不十分な原典研究に立ち、しかもかなり不透明な淺薄な獨斷の多くを犯してゐると思ふ。今後新しい根本資料の精査と、もつと深い人間教養との中から、曇れる部分と、濁れる部分とが除去せられるべきである。云はば、この清少納言論は、今の私のきざみ得た心の塑像である。將來幾度も改められなければならない一つの未熟な草案にすぎない。——といふことを前もつて斷つておかうと思ふ。

## 二

「枕草子」は、これを全體として見れば、きはめて短い文章を雜多にあつめた雜纂物である。凡そ小さな文章がきれぎれに輯めてある作品は、作者の自作以外の文章が單に同種類の性質を有する文章であるといふ理由のもとに、別人によつて機械的に書き入れられ、又は卷末等に追加される場合が多い。「枕草子」にも、さういふ事情があつて、作者自作以外のものも可なり加はつてゐるものと想像される。例へば

小原の殿の御母うへこそは、普門といふ寺にて八講しける聞きて、又の日、小野殿に人々多く集りて遊びし文つくりけるに  
耕こることは昨日に盡きにしをいざ斧の柄はこにくたさむ

と詠み給ひたりけむこそいとめでたけれ。こころとは打聞になりぬるなめり。(本文三卷本による。以下同じ。)

とあるのは、能因の玄々集に、

「傳大納言母七首」

として、その中に

備中守爲雅普門寺にて千部法華經供養しけるにあひて、またの日かへりけるに、花のいとおもしろくさきたりける所に車とどめて。

と詞書して出した歌と同一であり、しかもこれ等は拾遺集二十哀傷に

爲雅朝臣普門寺にて經供養し侍りて、又の日、これかれ諸共にかへり侍りけるついでに、小野にまかりて侍りけるに、花のおもしろかりければ。

と詞書のある歌がもとなり、恐くは作者以外の人が、打聞として増補したではなからうか。「こころとは打聞になりぬるなめり」とは、少くとも何人かの註釋的言辭ではなからうかと察せられる。又

御乳母の大輔の命婦、日向へくだるに、賜はする扇どもの中に、片つ方は日いとうららかにさしたる田舎の館などおほくして、いま片つ方は京のさるべき所にて、雨いみじう降りたるに、

あかねさす日に向ひても思ひいでよ都は晴れぬながめすらむと

と、御手にて書かせ給へるいみじうあはれなり。さる君を見おき奉りてこそえゆくまじけれ。

とある打聞は、玄々集に

「皇后宮一首」

とて、

一條院御時皇后宮につかまつりける女日向に下りけるにつかはしける。

と詞書してあげた歌であるが、これは、詞花集六にも、

つねに侍りける女房の日向の國へ下り侍りけるに餓し給ふとてよませ給ひける。

と詞書して載せられてゐるものである。

右の例に示した和歌に關する打聞の如きは、その當時歌壇の有名な逸話として喧傳されてゐたものらしく想像される。勿論これ等が、果して清少納言自ら書いたもので無いとは、にはかに斷定する譯に行かない。又それと同様に、清少納言以外の人の増補でないとも速斷する事は出来ない。ただ諸本によつて内容に増減のある事實よりすれば、かういふ所に作者以外の人による増補追加の事實もあり得るといふことを考へておきたいやうに思ふ。

又、ものづくしのやうな形をもつた類纂の部分の如きは、固有名詞や普通名詞より成る事項の羅列が多く、又きはめて短い切々の文章の列擧が多い。かうした場合事項が増加したり、註釋的詞句の混入したりし易いことは當然である。例へば三卷本に

物語は 住吉。空穗。殿うつり。くにゆづりはにくし。むもれ木。月まつ女。梅壺の大將。道心すすむる松が枝。こま野の物語は、ふるかはほりさがし出でてもていきしがをかしきなり。ものうらやみの中將、宰相に子うませ、かたみの衣など乞ひたるぞにくき。交野の少將。

とある條を、諸本に比較すると、

春曙抄——住吉。うつぼの類。とのうつり。月まつ女。かた野の少將。梅壺の少將。人め。國ゆづり。むもれ木。道心すすむる松が枝。こま野の物語は、ふるきはほりさし出でてもていきしがをかしきなり。



標本——住吉。うつぼの類。とのうつり。くにうつりはにくし。とは君。月待つ女。こまのは食ひものまうくる所にくき。むもれ木。かはほりの宮。

前田定本——住吉。おときき。うつぼの類。月まつ女。國ゆづり。殿うつり。梅壺の大将。道心すすむる。松が枝。こまの物語は、古きかはほりさがし出でてでもいきしがをかしきなり。くひものまうけたるぞにくき。かはほりの宮。むもれ木。人め。交野の少將。

右に示されたやうな著しい本文の相違は、作者の稿本から生じたものであらうか。それとも作者以外の人の改竄によつて生じたものであらうか。恐らく二つの事情が同時にあり得たのではあらうけれど、猶後者の場合が一層多かつたではないかと考へるのが、自然ではなからうかと思ふ。

又、諸本「社は」の條に、蟻通明神の縁起を説明する長い文章がある。これはわが國での出来事といふやうに語られてはゐるが、實は外國の傳説をもとにして形をかへたものである。「昔七十ニアマレハ他國へ人ヲ流ヤル國ニ有ケリ。ソレニ一人大臣老母ヲモトリ云々」と書き出した山口光圓氏の古鈔本打聞集に見える一説話が、その原形ではなからうかと考へられる。もし蟻通明神の縁起が、打聞集所載の説話を巧みに變形したものであるとすれば、清少納言の時代に於て已にかかる變形が行はれ、それが一般に流行してゐたか、或はその以後——少くとも打聞集の書かれた崇徳天皇の時代より後に、かかる變形が行はれて、それが枕草子に追加されたか、その兩様に考へられると思ふ。

右にのべた二三の例よりしても、「枕草子」には、作者の自記にからざる部分が混入してゐるやうに考へられる。なほ細部の一々の詞句に至つては、原作そのままと信ずることの出来ない異同が多い。換言すれば、「枕草子」の文章は、そのままごとく清少納言の自記であると絶対に云へないやうである。

次に「清少納言集」について見よう。群書類従所収の本と、圖書寮蔵の「異本清少納言集」とを比べて見ると、後半に著しい相違があり、異本の方がはるかに歌數が多い。前半の歌は互に出入があつても、大體一致するやうであるが、しかし詞書のみは何ゆゑか非常に相違してゐる。これ等の異同は、轉寫の際の誤りのみに歸し難きものである。これ等の相違は或は草稿本・清書本の差別による異同と考へるよりも、寧ろ別人の改修増補等の結果であると考へる方が、一層適切であるやうに思はれる。

右のやうに、「枕草子」にしても、「清少納言集」にしても、現存諸本はいづれも著者自筆の稿本そのものの面目を傳へるものではない。いづれも後人の手の加はつたものである。もしこの考へ方に誤りがなければ、私たちはかかる似て非なる「枕草子」又は「清少納言集」を取りしらべることによつて、直接的に清少納言その人の藝術を、正しく認識し、正しく批判することが出来るであらうか。これは先づ明かにしておかねばならない問題である。

右の疑問に對する解答は、しかしきはめて簡單である。曰く、それは絶対に不可能なことである。——といふより外はない。正しくない資料から正しいものを引き出すなど、魔術でない限り絶対に不可能である。けれども清少納言の研究に於て、たとひ不完全な資料であつても、そこから或る結論を見出さうとする熱望のみは捨て去るにしのびないものである。しかもこの熱望は前にのべた理由によつて、文學研究の正しい一面として許容されねばならぬ。それが出来ないなら資料の行きつまつた古典研究は全く手も足も出ないであらう。ただこの際私たちは、私達の現在もつてゐる「枕草子」も「清少納言集」も、いづれも原作に近い完全なものでないといふ自覺を一層鞏固にし、一方その完全なるものを求めようとする熱情に生きつつ、しかも一方可能なる限りに於ける正しい判斷に向つて益々専念すべきだと思ふ。一面的な視野から他面を輕視し侮辱する場合に、果して學問に對する敬虔が認められるか否かは疑はし

い。とにかく、「枕草子」及び「清少納言集」の現存諸本は、純粹な意味に於ける清少納言その儘の藝術の形を示すものではない。従つてどの資料も極めて不正確だと云ふ事を、先づはつきりと自覺しておかなければならない。

### 三

「枕草子」には異本が甚だ多い。諸本によつてその内容——特にその組織に著しい相違がある。「枕草子」の原形とその成立とに關する學說に紛糾の生じた理由は即ちここにある。

しかしながら、「枕草子」諸本に共通する性質として、少くとも内容上に四種の部分の存することは區別し得られると思ふ。即ち(一)和歌に聯關する美的事項の類聚(二)和歌に關する打聞又は説話集(三)作者の經驗談(主として自讃談)(四)隨感隨想錄——以上の四つである。現在最もよく行はれてゐる「春曙抄」系統本を、今ここでかりに流布本とよぶならば、流布本は右四つの部分が互に混亂し交錯したものと見ることが出来る。「枕草子」全體を一つの隨筆と見ることによつて、流布本の如き組織なき雜然たる形態をそのまま原形とみなす説もある。又他の理由から、類纂的形態と、隨筆的形態とに、打聞・説話・自讃を一括する形態を加へ、少くともその三つの形態が別々に成立したと考へるのが自然ではないかといふ説も成り立ち得る。そして私達は現在までにまだこの考へを改めなければならぬ程の根柢ある反對説を聞かない。今は、私のさう推定する根據を、諸本の形態の上から離れて、寧ろ創作心理過程の上から、別に少しく考察して見ようと思ふ。

第一の類纂的な部分は、自然及び人生に互る文學的事項を分類して聚めたもので、聯想と分類とを主にした辭書的興味が中心となり、第二の打聞・説話・自讃談等を聚めた部分は、備忘録的興味が中心となり、第三の隨筆的な部分

は、自然及び人生に對する直接的な作者の感想を集めたもので、創作的もしくは思索的興味が中心となつてゐるやうに思はれる。「枕草子」全體を一つの隨筆と見て、右の各部の成立が同時であるとす論者は、その各々の部分の興味と關心とが、浮雲の如く雜多に去來する所に、文學作品としての特別の面白味を見出さうとする。今「徒然草」について見るに、その外形はきはめて雜多でそして不統一に見えるが、しかしその實雜多を貫く本質的精神はきはめて單一である。それは辭書的な興味や、備忘録的な興味の雜居ではなく、むしろ單一な思索的興味によつて統一されてゐるやうである。「枕草子」と「徒然草」とは、それ故形式に於て類似してゐても、本質に於て決して共通してゐないといふ事が出来る。「枕草子」に於ては、その隨筆的部分のみが、わづかに「徒然草」の統一的精神と共通する。「枕草子」に於て、相對立する別々の關心が、走馬燈のやうに、くるくる次から次へとめぐるましく回轉しつつ執筆されたとは考へられない。隨筆文學の特質は、むしろ深い思索の中に「我」が沈潛して行かうとする所に存すると思ふ。この點よりしても、私は「枕草子」の右の四つの部分が、同時に入り亂れて雜然と執筆されたとは考へられないと思ふ。

右の問題を今少し詳しく考へて見よう。「枕草子」の内容はあまりに雜多である。しかも、その文章の形式および内容が雜多であるといふばかりではない。文章を書かうとする作者の氣持そのものが、已に雜多でありすぎるのである。成程近世以後の隨筆集には、内容上雜多なものが甚だ少くない。けれども、それ等の作品に於ては、内容の雜多に比して、作者の氣持と意圖とは極めて單調である事が多い。それ等は、ほとんど符節を合せるやうに備忘録的、百科辭書的興味によつて統一されてゐる。しかるに「枕草子」に至つては決してさうでない。もし流布本の形を信するなら、作者の氣持は複雜といふよりもむしろ混亂と云はねばならぬ。眞の隨筆文學は、それが文學であればあるだけに、益

々雑多の形式を具へつつ、しかも純一な精神によつて統一されてゐる筈である。雑多の中に一貫せる情調と氣分とが生々として溢れてゐなければならぬ。雑多の中の統一、それが隨筆文學の特質でなければならぬのかかはらず、「枕草子」の流布本の形に、私たちは作者の氣分の統一を見ることは絶対に出来ない。このままの形では、作者が執筆の際に經驗した心持を單に想像することさへ困難である。

枕草子にあらはれた一つ一つの記事を通じて見ると、清少納言は、かなり一本調子な單純な性格の持主であつたかのやうに考へられる。清少納言は、創作中、自然的に昂揚して行く感情を、急角度に轉向せしめて、全く別種的情調の中に隨時にひたるといふやうな心理過程を、しかも計畫的に經驗することの出来るほど、複雑な心をもつた作家であつたと考へられないのみならず「枕草子」の文章の一つ一つは、それ自身がかくの如き淺薄なトリツクの中に書かれたと想像の出来る程低調な文章と誰が考へることが出来るであらう。文章の各々が、たとひ少からず他人の手に犯されてゐるとしても、なほそこには作者その人の純粹な統一的な感情のひびきをも十分傳へてゐる。否それがなければ書けない文章である。かくて、流布本の「枕草子」は、もと統一せる興味をもつて別々に書かれた所の文章をあつめた雜纂物が、いづれかの機會にばらばらになつて、再び無秩序にとち合はされた形ではなからうかと推定する一つの理由が生ずるのである。

しかしながら「枕草子」の原形に關する推定は、嚴密なる科學的研究から導かれた結論の上に立てられなければならない。右にのべた創作心理過程の主觀的な考察に基く推定の如きは、あくまでも一箇の想像説にすぎない。その根據はきはめて薄弱である。ただ、しかし、この問題に聯關して、少くとも次のやうな事は考へられないであらうか。即ち、「枕草子」の記事を通じて、清少納言の「人」又は「藝術」を論じようとする人は、如何なる人でも、先づ草子

中の記事を、少くとも、假りに類纂的な部分と打聞的なものもしくは自敘傳的な部分と隨感隨想的な部分との三つに分けて、そこからはつきりとした作者の全貌を把握しようと思つてはなからうか。否さうすることより以上に、適當な方法が他にあり得るであらうか——といふことである。

私は、「枕草子」にゑがかれた清少納言の姿の斷片は、それをゑがいてゐる一つ一つの記事を、作者の創作心理の中に動いた感興を中心として整理することによつてのみ、全體として認識され得ると思ふ。どんな小さな事實、ささやかな事件の敘述の中にも、清少納言の全容が躍如として動いてゐる場合がある。それ等の敘述は、その敘述の本質をなしてゐる「興味」が何であるかといふ認識を背景として、益々明確に作者そのものを描き出し得るではなからうか。即ち「枕草子」中に見える所の打聞的性質を有する多くの記事は、その本質たる打聞的興味を背景として考へられることによつて、又類纂的性質を有する多くの記事は、同じくその本質たる分類的興味を背景として考へられることによつて、それぞれの價値が一層明確に意識され得るではなからうかと考へるのである。

右の如き理由から、「枕草子」の記事を、三種に大別し、これ等が、それぞれ如何なる性質の感興によつて執筆されたかを考へ、そこから清少納言の「人」をゑがき、又その「作品」を批判するといふ手續は、少くも妥當ならざる方法として排斥される理由は毫もないと考へられるのである。

## 四

「枕草子」は前項にも述べたやうに、大體類纂的な部分と、打聞的な部分と、隨筆的な部分との三者から成つてゐる。そして、その三つの部分は、それぞれ執筆の動力たる感興の性質を異にしてゐる。この異なる感興の性質をはつき

り意識することは、清少納言の評傳を評みようとする際何よりも重要なことと云はねばならぬ。

第一の類纂的部分は、大體(一)客觀的な事物に關するものと、(二)主觀的な精神内容に關するものとに大別することが出来るが、(一)は更に

一、自然の現象に關するもの。例へば、日は、雲は、ふるものは等。

二、地理地文に關するもの。例へば、山は、森は、池は、島は等。

三、土木家屋に關するもの。例へば、關は、橋は、みささぎは、社は、寺は等。

四、動植物に關するもの。例へば、木は、鳥は、馬は等。

五、神佛に關するもの。例へば、佛は、神は、だらには、修法は等。

六、人に關するもの。例へば、法師は、女は、大夫は等。

七、趣味娛樂に關するもの。例へば、ひくものは、歌は、物語は、遊びは等。

八、裝束に關するもの。例へば束帯は、狩衣は、夏のはきはぎは等。

九、日用品又は調度に關するもの。例へば、ひあふぎは、織物は、すずりの箱は、疊は等。

に細別する事が出来、又(二)の部分は、めでたきもの、あはれるもの、にくきもの等の如き感情内容の分類であつて、これは、大體美的なものと、美的ならざるものとの二種に區別することが出来るやうである。

右の中(一)は、古今和歌六帖や、倭名類聚抄の如き分類に従つて、和歌に關係ある題材を類聚し、これに文學的表現による解説を加へたものであり、(二)は作者獨特の組織に従つて、精神内容を分類し、これに具體的な解説を加へたものであると考へたい。もしこの假説が許されるなら、この類纂の部分の執筆にあつて作者の體驗した感興は

先づ第一に、かかる新しい形式を創造するといふ計畫、自身に在るべき筈である。恐らく作者は、かつて何人もなし得なかつた新しい形式を案出して、和歌の手引草、文學のための新しい百科辭書を作るといふその好ましい計畫に、我れと満足のほほゑみをもらしつつ筆をとつたものと想像したい。

次に作者の胸中に湧いた感興は、學術的な分類の立て方にあつたものと考へたい。如何なる分類法に従つてこの計畫を具體化するかといふ問題に對する作者の關心は、相當深いものがあつたと見るべきである。「枕草子」のこの一面を通じて見られる作者の風貌は、藝術家的と云ふよりも、むしろ學者的である。勝氣な作者が敢て歌そのものをもつて他と競ふ冒險をせず、かへつて歌の百科全書をもつて、これによつて他と對立しようとしたのは、寧ろ適役を買ひ得たものと考へて差支ないと思ふ。一條兼良の「寂寞草鈔」に引かれた玄惠法印の「藝女傳」によれば、清少納言の著す所には「枕草子」以外に「萬葉部類」といふものがあつたと云ふ。この説の當否は知らないが、萬葉學者として知られた梨壺の五人の一人たる元輔の女である作者が「萬葉部類」——恐らく類纂書であらう——を著したといふことは、いかにもありさうなことであり、又さういふ人であつて、益々「枕草子」中の類纂を執筆し得る可能性が濃厚になつて來ると思はれるのである。

次に作者が類纂を執筆するにあつての第三の感興は、聯想に對する興味である。次から次へと自由に馳せて行く聯想の面白味に、勝氣な作者はこれぞ自分のみに與へられた特權と考へて、ひとり得意の微笑をもらしたではないかと想像される。一寸見ると、枕言葉の下に、次々と連ねて行く名詞の列ではあるが、しかしそこには形式として音樂的な律調、内容として生々とした活潑な聯想が稻妻のやうな早さで動いてゐる。そこに選ばれた事物の名前は、特に古文學、就中和歌に關係あるものが最も多く、傳説に關係あるものが之につき、奇妙な名前の魅力が更に之について、



情緒的な聯想をいよ／＼豊富ならしめてゐる。

右のやうな考へ方よりすれば、清少納言は、平安朝中期に行はれた美の意識を分類し、整理して、或る種の美論を示したと云ふことも出来る。そしてその中心の感興は、純粹な藝術的興味と同時に、寧ろ一層學問的興味の方が重きをなしてゐるやうに考へられる。ここに「枕草子」の一つの特徴が見出され、又作者清少納言の趣味なり教養なりの一面——云はば「人」といふものの一面（それは嚴密な意味での一面ではあるけれど）が反映してゐると云はれると思ふ。

第二の打聞的な部分は、和歌に關する興味ある逸話をあつめたものと、物語傳説の如きものを輯めたものと、作者自身の經驗した日記的性質を有する幾多の自讃談をあつめたものから成つてゐる。この一群の敘述は、恐らく折にふれて、そこはかとなく書きとどめられたものであつて、第一の類纂的な部分とは自ら成立の事情及び時日を異にすると思はれる。この部分を執筆する時の作者の中心の感興は、博學を求むる心に基く備忘錄的な興味と、自己の才能を他人に知らしめようとする一種の術學的な優越感に對する興味と、廣く美的な物を求むる興味との三つではなからうかと思はれる。そしてこの三つの關心の中核をなす美的意識は、「機智」であつて、作者はその「機智」によつて文學的生活のすべてを統一しようとしたかのやうに理解される。

右の打聞的な部分に於て、作者の感興を動かした主題の性質は、深い人生の觀照から來たものでもなく、又深い學問の研鑽から出たものでもない。上にのべた一つの「機智」によつてキャッチされ、かつ生かされた人生の片鱗又は、學問の斷片である。それ等は決して反省と思索との中からにじみ出たものではなく、むしろ非常に動きやすく敏活なる才氣によつて擷まれたものである。作者は、その深からざる、しかも博き知識を巧みに實生活の上に活用し得るほ

とんど驚嘆すべき頓才を恵まれてゐたと解せられる。この動きやすい才氣は、作者をして靜かな、落ちついた思索に沈潜することを許さなかつたやうに見える。作者は、常に何者にも負けないといふ優越感と、朗かさ、ナンセンスとを、實生活の上に巧みに實現したけれど、何等の憂愁も涙も知らなかつたやうにも考へられないことはない。この見解からして、清少納言と紫式部とを全く對立する性格と觀する見方も生ずる。紫式部日記や源氏物語を通じて見る式部の性格は、清少納言のそれとは全然別のものであるやうにも考へられる。式部に於ては性格に深さがあり、思慮があり、物の表皮から内實へと見透さうとする心の動きがあり、人に勝たうとするよりも我れに克たうとするつつましい努力がある。従つて性格のどこかに、外から見えない不透明——一種の幽かさといふやうな部分さへもある。しかし清少納言の個性はこれ等とは全く反對のもと考へられ易い。たしかにこの打聞の部分に於ては、私たちは、さういふ清少納言の一面を見出すことが出来る。しかし、清少納言の本當の性格をいち早くさうとりきめてしまふ前には、私達はもつとその家の集を味はなければならぬ。何が故に、街學的でなければならなかつたか。何が故に傲慢でなければならなかつたかについて、今一度もつと深い考察を試みる必要があらうと思ふ。清少納言の眞の姿は、果して従來考へられてゐたままのものであつたらうか。猶この事に關しては、別にもつと詳細に考へて見たいと思ふ。

次に第三の隨筆的な部分は、他の二つ部分とは少しく性質を異にしてゐるやうに思はれる。何物にもとらはれない純情をもつて、直接的に自然及び人生の「美」なるものにふれようとするきはめて謙讓な詩人らしい態度が見える。むしろこれこそ、清少納言の本當の姿の一面ではなからうか。

五月四日の夕つかた、青き草多くいとるはしくきりて、左右になひてあか衣きたるをこのゆくこそをかしけれ。

九月廿日あまりの程初瀬にまうでて、いとほかなき家に泊りたりしに、いと苦しくて唯寝に寝入りぬ。夜ふけて月の窓よりもりたりしに、人の臥したりしどもが、衣の上に白うて、うつりなどしたりしこそ、いみじう哀とおぼえしか。さやうなる折そ人歌よむかし。清水などに参りて、坂本のぼる程に、柴たく香のいみじうあはれなるこそをかしけれ。

人の顔にとりわきてよしと見ゆる所は、度ごとに見れども、あなをかし珍しとこそ覺ゆれ。繪など數多たび見れば、目も立すかし。近うたてる屏風の繪などは、いとめでたけれども見もいれられず。人のかたちはをかしうこそあれ。にくげなる調度の中にも、一つよき所のまもらるるよ。みにくきも、さもこそはあらめと思ふこそわびしけれ。

成心のないすなほな心は、直ちに事象の本質に肉迫する。それは表面を淺く流れ去る感激ではなく、深みの中のその奥底に湛へられた靜寂にふれる喜びそのものである。その靜寂とは、永遠の「美」に外ならない。紫式部や孝標の女などの體驗したのも、この喜びであつた。その喜びは、決して單に皮相な「機智」からでもなく「才」からでもなく、まして「學問」からでもなく、まことな、すなほな、澄みきつた、朗らかな人間らしい心に於てのみ感じられる筈のものである。「異本清少納言集」の卷頭に、

ありともしらぬにかみ卅枚に文をかきて

わすらるる身のことわりと知りながらおもひあへぬは涙なりけり

と感傷的な述懐をもらし、數々のあはれな歌をものした作者は、「枕草子」に於てほとんど饒舌かと思はれる位の得意な自讃談をならべてゐる作者とは、全く別な性格を私たちに示してゐるではないか。かうした淋しい一面が、清少納言にあつたといふことを、何故多くの批評家は輕々しく見逃して來たであらうか。この好ましい一面が、單なる駄洒落やうぬぼれから、どれほど多く「枕草子」の記事の一つ一つを救つてゐるかといふことを、私たちはもつとはつ

きり認識しなければならぬと思ふ。

以上のべたやうに、「枕草子」には大體類纂的な部分と、打聞的な部分と、隨筆的な部分との三者があるが、其等の各々の執筆される場合に隨伴した感興の性質が如何なるものであるかを考察し、何故に作者はかかる感興に生きなければならなかつたかを吟味することによつて、私たちは或る程度まで作者清少納言の「人」とその「藝術」との本質にふれることが出来るではないかと思ふ。そして私たちは、嘗つてこれ等の作品を通じて直接的に感じ得た所謂清少納言なる女性の姿の奥に、更にもう一つの別な姿を感じる事が出来るやうな氣がする。

## 五

前項に於て述べたやうに「枕草子」の記事をその性質の上から三つに大別し、主にその第一類の類纂的な部分は學術的な興味のもとに成り、第二類の打聞的な部分は街學的な興味の下とに成り、第三類の隨筆的な部分は全く純粹な創作的意欲の下に成つたものと見ることは不都合ではない。私たちは従つて第一類は、學問藝術に關しての實用的な動機が主となり、第二類は、勝氣な氣ままな婦人の得意な雄辯を通じての自己満足が主なる動機となり、第三類は、永遠の「美」に向ふ純粹創作的な動機が主となつて書かれたものと考へて一應は差支ないやうに思はれる。勿論もつと深く考ふべき幾多の部分が殘されてはゐるけれど。「枕草子」の内容に於ける右の三つの部分の中、類纂的な部分は、前にも述べたやうにその形式の案出といふこと自體が創作的である。これがもし李義山の雜纂を模倣したものであるなら、「枕草子」の藝術的價值はどれだけ減殺されるか知れまい。この種の文章の形式は、最も模倣され易く、従つてかなり凡庸な作家も、存外すぐれた第二の「枕草子」を作るかも知ない。しかし、それ等は、假りに如何程巧妙にな

されてゐたとしても、まがひ物であり、眞似られたものである。「枕草子」が最初にかくの如き形式を案出したといふその案出自體が、他の何物よりも最も高く評價せらるべきである。

私たちは打聞的な部分について今少し深く考へて見る機會に達した。凡俗な周圍に對する反逆的な作者の精神を私たちはこの部分に十分認めることが出来る。この反逆的な心持は、學問藝術の家に生れ、且自らも亦非凡の學才を惠まれた作者が一種の自負心をもつて他を見下したためか、又は官仕の際年齢が他の同輩よりも長じてをり、従つてそれ等と平凡な起居を共にすることを辱しとしなかつたためか、又中宮定子が、作者の才を愛し、その機智を一種の慰み物とされ、作者がそれを自負して益々得意になつたためか、又作者の容貌や、戀愛生活が、その自負心を十分満足させる程惠まれたものでなく、従つて作者はその憂鬱のやり場を、ここに求めたためか、その理由を様々に考へることが出来るであらう。私たちは決して從來なされたやうな輕卒な斷定に安住し満足してはならない。明かに周圍の俗衆に對するつよい嘲笑と反抗とを示したかの多くの自讃談が、果して如何なる内面的な理由によつてなされたかは、清少納言の評傳に於て、最も中心的な研究問題となるであらう。少くとも私たちは、この際外部的なしかも一面的な事實の片鱗のみを見て、直ちにその本質を論斷し去るやうな輕卒と不謹慎とをつつしまなければならぬ。

およそ優秀なる藝術家は、彼が優秀であるだけに、益々凡俗に對する反逆的傾向を——たとひ無意識的にも——取らざるを得なくなることを、私たちは多くの實例にをしへられてゐる。「枕草子」に於ける幾多の自讃談は、これをそのままに見れば、作者の非凡なる學識と、驚くべき機智とを示し、そしてそれ等を公然と平氣で宣傳して得意になる點よりして、作者の愛すべき無邪氣な性格の一面が示されてゐると解せられる。そしてこの一面より見れば、ともしれば淺薄なる才人と評し去られさうな單純な性格を有する清少納言にちがひない。しかし私たちは、むしろ、それ

等の傍若無人な人をつた言動の中に、少し異なる清少納言の面影を多くすることは出来ないであらうか。かへつてそこに人一倍のやるせなさを感じ、人知れず淋しさに涙ぐみながら、しかも、その弱さを決して他人に見せまいとする勝氣な清少納言の姿を想像することは不當であらうか。

清少納言は類纂の部分に於ても、打聞の部分に於ても、彼女の感じ得た「美」なるものを、正直に物語つてゐる。

「美」を表現する幾多の形容詞・副詞・感動詞は、ほとんど「枕草子」一篇に集成されてゐるかの觀がある。作者が、靜かに自然の美にうたれ、ひとり人生の眞に目を見はつてゐるその謙虚な愛すべき姿は、至る所に認めることが出来る。一條天皇・中宮及びその御兄の公達は、紫式部に於ける中宮彰子及びその一門の人々の如く、隨所に「美」の權化として多き出されてゐる。それ等の「美」は、感覺の表面を流れ去る刹那的な「美」の影ではなくて、はるかに高く、そして深きに潛む永遠の美の姿である。かの隨筆の部分に於て、私たちが最もしばしば目にふれた詩人らしい澄みきつた作者の性格の如きは、紫式部のそれと少しも異なるものではない。

清少納言は何等の深い悩みもたなかつた、ただ男まさりの理窟屋で、裏もなく表もない、見たままの單純な性格の持主であつた——といふやうな批評を屢々きくことがある。それ等の批評は、果して「枕草子」をしんみりと味讀した上でなされたであらうか。少くとも「清少納言集」「異本清少納言集」を、靜かにくりかへし讀んだ上でなされたか、すこぶる疑問としなければならぬ。なぜなれば、清少納言の家の集といふものは、ほとんどすべて憂愁と寂寥とをもつて滿されたあはれ深き歌のみによつて成立つてゐるからである。家の集よりのみ見れば、私たちは「枕草子」の作者とは全く反對な靜かな婦人、几帳のかけにひそと涙ぐむしをらしい女性の外に、如何なる人の姿をも想像し得られなかつたと思ふ。紫式部はその日記に於て、「清少納言こそしたり顔にいみじう侍りける人。さばかり賢し

だち、まなかき散らして侍るほども、よく見れば、まだいと堪へぬことおほかり」と批評した。又この人に關しては豪放磊落で細行を慎まなかつたとも、大酒家で不行跡が多かつたとも、様々の傳説が傳へられてゐる。又老後零落して京の郊外に住み、若い殿上人がその宅の前を通つた時に「駿馬の骨をば買はずやありし」と叱つたといふ説話のごときは、清少納言の一面を最もよく物語つてゐるやうに思はれるが、しかしこれ等は、果して何處までまことの清少納言の全面を語るものであらうか。

清少納言の家の集と、「枕草子」とを屢々繰りかへし味讀する中に、私たちは所謂「清少納言」の姿の向ふに、も一つの「清少納言」の幻の存することを意識し、そしてその第二の幻影の前に思はず襟を正さずにはゐられない。その幻影は、かつて私たちの考へてゐた「清少納言」よりも、もつと深みのある、そしてもつと靜かな親しむべき女性としてのものであつた。彼女が「枕草子」に於て、眞正面から漢文學の知識をふりかざし、周圍の凡俗を煙にまき、廷臣宮女達を眼下に見下し、嘲笑し、擲揄して憚らなかつた事は事實である。しかしそれは果して何の爲になされたであらうか。私たちはさうした反逆的の行動の直後に於て、果して彼女が心からの愉快に陶醉し、安住し得たらうかと疑ふ。彼女は數々の女らしからぬ行爲に對して卒直な忠言をよせられた中宮の御氣持に對しても、「をかし」「めでたし」と微笑をもつて同感するだけの餘裕を失はなかつた。中宮の御批評に對しては何もかも皆分り盡してゐる彼女であつた。決して單純な一本調子のわからず屋ではない。彼女はかなり深刻に世を味ひつくしてゐる。數々のあののはしたなさうな反逆の後に、直ぐ彼女は深い寂寥と憂愁とを感じたと解するのは自然である。餘りに天才的で優越してゐた彼女は、ただ平凡に周圍に妥協することが出來ず、つい不知不識の中に他に叛き、しかもその叛ける自己の姿を、何かの機會にふと自覺することがあり、さういふ時必ず誰もが經驗するやうな一種の淋しさにおそはれたものと考へ

たい。かの多くの自讃談の如きは、前にものべたやうな、幾多の理由にもよるであらうけれども、なほ彼女の性格を  
れ自身の中に、さうした非妥協的なものがあり、しかもそれが彼女において深い寂寥の原因であつたにかかはらず、  
なほかつその癖をどうすることも出来なかつたと解しておき度い。彼女のあの男まさりの傍若無人な振舞は、かく考  
へることによつて、單なる氣まぐれや、なぐさみなどの何物でもなく、もつともつと根本的な必然的な深い心の問題  
として考へられるべきものとなるであらう。

「枕草子」は「源氏物語」とならび稱せられる。しかしその藝術的性質において、「枕草子」はたうてい「源氏物  
語」に比べられるべき作品ではない。それは、清少納言その人が、紫式部よりも藝術的才能に於て劣つてゐたためと  
いふよりも、むしろ「枕草子」の形式——「類纂」、「打聞」等の如き外面的形式が、抒情詩のゆたかな「物語」に比  
して、藝術的魅力に缺乏してゐるためである。「枕草子」の如き特殊な形式をもつ文學は、とかく類型的になり、物  
の見方や表現の方法が固定し、従つて、平凡なマンネリズムに墮落しようとする傾向さへも甚だ多い。徒もすれば、  
私たちをして書かれてゐるものに感心はしても深くうたれることがなく、その廣がりを見ても深さを見ることの出来  
ないやうな物足りなさを感じしめることがある。しかし、これは、「類纂」とか「打聞」とかの形式から來ることであ  
つて、必ずしも作者清少納言の「人」から來るものではない。もし紫式部が「枕草子」を作つたとしても、恐らくは、  
今の「枕草子」より以上の名作は作り得なかつたと思はれる。吉野吉水社に藏せられる後醍醐院御物の「樂書」によ  
れば、清少納言は、「源氏物語」に對抗して、「曇る藤氏」といふ物語を作つたが、その不出來なるを恥ぢて、皆焼き  
すてた後、改めて「枕草子」を作つたといふ。これは無名草子や、異本紫日記等と同じやうに、清紫二女を相對立し  
て考へるやうになつてから生れた傳説と思はれ、勿論信すべきかぎりのものではないけれど、しかし、やはりその傳



説の如く、清少納言は「枕草子」を執筆することが最もその天分にふさはしく、紫式部は「源氏物語」を作ることが同様に最もその個性に似つかはしく、結局適材が適所に置かれたと見るべきことは誤つてゐないと思はれる。

私の試みに提案して見た清少納言の「人」と「作品」とに關する考へは、與へられたページの中にはまだ云ひ足りない部分が多いけれど、とにかく従來の見解とは少しく異なるものであつた。しかしこの考察は、貧弱なそして不十分な資料の研究に立ち、しかも疊りのある幾多の獨斷を犯しつつなされたものである。私は私の現在に於てゑがき得るこの清少納言の幻影が、今後不斷にかつ永久に修正され行く筈の、云はば未完成な塑像であるべき事を、ここに再びくりかへして筆を擱かうと思ふ。(昭和七年十一月四日稿)